

# アルゲートオンライン

Argate  
Online

～侍が参る異世界道中～

touno tsumugu  
桐野 紡

### アルティオ

ユシュト村出身の賢者。  
空気の読めないナルシストだが、  
仕事は堅実にこなす。

### リティナ

ギルドの受付嬢その二。  
セクシーなお姉さんタイプで、  
熱狂的なファンが多数いる。

### アラベル

ギルドの受付嬢その一。  
元気いっぱいでもっと天然。  
パンチラが多いのはご愛嬌。

### リーリヤ

たかす  
「鷹の巣団」の女剣士。  
王都にまで名を轟かす使い手だが、  
口が悪いのが玉に瑕。

### アネツテ

エルフの精霊術士。  
人攫いによって連れ去られたところを、  
リキオーに助けられる。

### リキオー

VRMMO「アルゲートオンライン」の世界に、  
侍として転生した普通の青年。  
豊富なゲームの知識で異世界をチートに遊び尽くす。

### ハヤテ

リキオーに飼われることになった、  
狼モンスターの子ども。  
毛がモフモフとしていて女性受けがいい。

## 1 異世界にて

稜威高志が目を覚ますと、そこは温暖な森の中だった。

「あ、あちい……う、うう」

ぽかぽかと照りつける陽の光にうなされ、高志の意識は次第に覚醒していく。それでも、もう一度眠ろうと無駄なあがきを続けていたのだが、ついに耐えきれなくなりガバツと体を起こした。

しばらくぼうっとしてしまふ高志。しかしやがて肌にとわりつく空気のリアルな感触に違和感を覚えはじめる。そして、意識がはつきりすると急に驚きの声を上げた。

「なっ、何だあ？」

目の前には、見たことのない風景が広がっている。

しかも外だ。

高志は昨夜、テスト勉強をしてから寝間着の甚平に着替え、ベッドで寝たはずだった。それなのに、今身につけているのは高校の制服の黒ズボンに白シャツ。なぜか手の甲から腕にかけてを覆う籠手と、太ももには佩楯を装着している。一応、鎧も着ていたが、胸の部分には大きな隙間が空い

ており、制服の白いシャツが覗いていた。そして足には、運動シューズ。

手を動かすと、重たい金属に触れた。

高志は「む？」と眉間にシワを寄せながら、それを握りしめて引き寄せる。眼の前に持ってきたその物体には見覚えがあった。

シブい朱色の反りが入った長めの鞆と、金属製の鐔と鶴の紋所……。

「な、正宗？」

正宗とは、彼がプレイしているVRMMO、つまり仮想空間再現型オンラインゲーム『アルゲートオンライン』に登場する武器である。

握りの部分に施された赤い糸の刺繍や、鐔に入っている鶴の紋所は、たしかに見覚えのある意味で、彼がゲームの中で使用していた正宗に違いない。しかし、正宗はゲーム内のアイテムだ。現実にあるはずがない。では、今、彼は『アルゲートオンライン』をプレイ中なのか？

現実の高志の左手の付け根には過去の事故による傷痕がある。今ではもうかなり薄くはなったが、未だに醜い治療の跡が残っている。VRMMOは高い精度で現実を再現していたものの、ゲームでは傷痕までは反映されていなかった。

しかし、その傷がちゃんとここにある！

それは、今いる場所がまごうことなき現実であることの証明ではないか。

「まさか、俺、ゲームの中にいるのか？ ありえないだろ」

暗い朱色の鞆の鯉口を握り、少しだけ抜いてみた。美しい刃紋がキラキラと輝く。

「ゲームだとしたら、自分のステータスは表示できるのか？」

そう思い、高志は「ステータス」と口にしてみた。

すると目の前に半透明な青い画面が現れ、ステータス画面と思われるものが表示される。

「うは！ 本当に出るとは。しかし面白いな。ところでログアウトボタンあるかな」

ゲーム中であるならログアウトボタンを選択すれば、元の世界に戻るはずだ。

しかし、ステータス画面からメインメニューに戻り、ログアウトの操作をしようとしたのだが、その項目自体が見当たらない。

「切断メニューないんだけど……。じゃあ、ぐわしだな。って、ぐわッ、できねえ……。指痛えし」  
「ぐわし」というのは、ある漫画家のコメディ作品に登場する、中指と小指を折り曲げ他の指を真っ直ぐに伸ばした手の形のことだ。

なぜ今「ぐわし」をしたのかというと、バグなどで切断メニューが開けないときに、特定の動作を繰り返すことで強制的にログアウトさせる機能が『アルゲートオンライン』にあり、それに彼が登録していた動作が「ぐわし」だったのである。

この手の形を現実でやろうとすると、薬指と小指が連動するため、なかなか難しい。しかし、ゲーム上では簡単にできたので、一時期かなり流行った。

それで今、高志はその「ぐわし」を試そうとしたのだが、現実と同じように薬指と小指が連動し

てぐわし”の形にならなかった。さらに、無理にやろうとすると痛みを感じた。痛みが知覚できるといことは、ペインアブソーバーが機能していないことになる。

ペインアブソーバーとは、『アルゲートオンライン』のシステム設定で、痛みを制御する機能である。またそれ以外にも、恐怖などの感情も制御する。

例えば、敵に襲われてヒットポイントが1になり瀕死になれば、現実では動けるはずもない。

ところが、『アルゲートオンライン』の世界では、死に対する恐怖が抑制されているのに加えて、戦闘では痛みを感じない。そのため、ヒットポイントが1でも戦うことができたのだ。

「やっぱりゲームじゃないみたいだな。まあ、でもこれだけは試してみないと」

そう言うと、高志は自分の指を正宗で切ってみた。

ゲームでは自傷行為そのものができなかったし、他人に切られても血は出なかったが、今、正宗で切った指先からは、赤い血がぽたぽたと垂れている。それを舐めると血の味がした。

「痛え。リアルじゃねーか……」

ゲームの中では、傷ついても街中などのセーフティエリア内であれば回復速度が早くなるはずだが、ここは野外に見える。おそらくセーフティエリア外だろう。そもそもゲームではない現実ならばそんな恩恵が得られるはずはない。

高志は気を取り直して、再びステータス画面を確認してみた。そして、驚くとともに笑ってしまった。

ステータス -STATUS-

名前 : リキオー (17)  
クラス : 自由人  
ジョブ : 侍  
レベル : 1

LP 12 HP 33 MP 4

力 : 22 耐久 : 9  
器用 : 13 敏捷 : 8  
知力 : 4 精神 : 4  
運 : 6

ボーナスポイント : 10

「なるほど、この世界では俺はリキオーなのか!」

リキオーとは、高志が『アルゲートオンライン』の中で使用していたハンドルネームだ。名前の横の17という数字は彼の実年齢を表している。

クラスは、その人物が何者であるかを示す項目だ。ゲームをはじめたばかりの冒険者は大概「自

由人」となっていて、どんなジョブも選択可能になっている。

「LP（ライフポイント）12つめっちゃ低いなあ。ていうか、レベル1って何よ」

『アルゲートオンライン』では、高志のアバターのレベルはカンスト、つまりカウントがストップし、これ以上は上がらないという上限値まで達していた。当然、アビリティ、ジョブ専用のウエポンスキルなど覚えられる能力は全て覚え済みだった。

しかし、表示されたステータス画面ではレベルは1になっており、その面影おもかげはない。以前に獲得していた能力もほとんど記載されていない。

目の前に出た半透明な仮想スクリーンのボードを指で触つてみると、各ステータスの数字を弄いじることができた。

どうやら、ボーナスポイントを振り分けることができるらしい。

現在、各種ステータスはおしなべて平均なので、ボーナスポイントで特化させるといわけだ。『アルゲートオンライン』を初めてプレイした時も、この振り分けをやったと思うが、高志はすっかりそのへんのことでは忘れていた。

しかし、ひとつ気になることがある。数値の中には格段に高いものがあるのだ。LPが12に対して、HP（ヒットポイント）が33と三倍近い差となっている。

ちなみに、HPは、プレイヤーの生命力を表す数値ではあるが、すべて失われても死ぬことはない。HPはLPを守る壁のような扱いで、HPがなくなるとLPが減っていく。なお、LPがなく

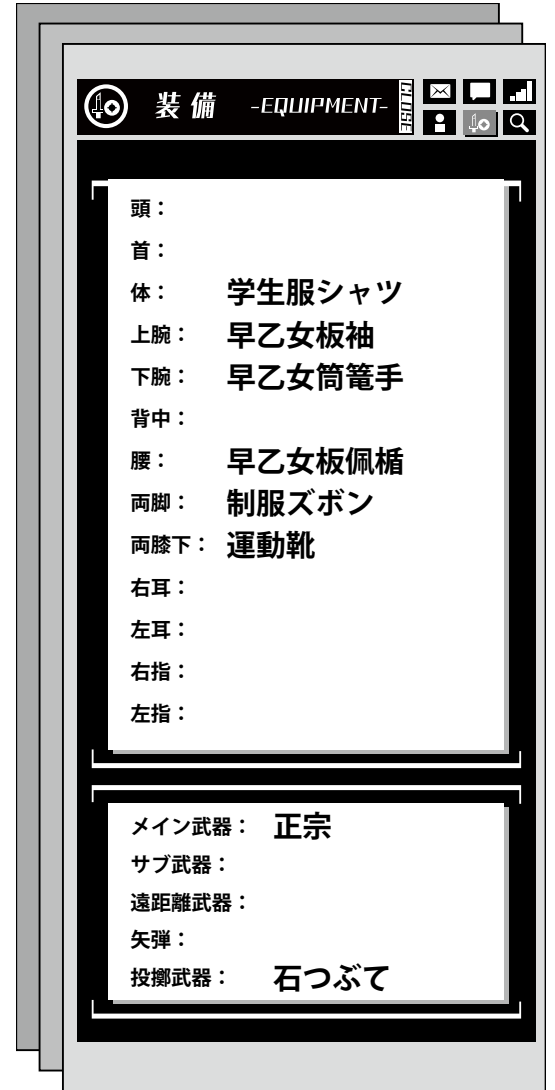
なることは死を意味する。

高志はしばらく考え込んでいたが、やがて答えに行き着いた。

「そうか！ 装備による加算か」

ステータス画面を横にスクロールすると、装備画面が現れた。





装備できる体の部位は頭、首、体、上腕、下腕、背中、腰、両脚、両膝下、耳の左右、指の左右。武器は、メイン武器、サブ武器、遠距離武器、矢弾、投擲武器を装備することができた。装備してないところは何も表示されず空きになっている。

「なるほどな。袖に籠手、佩楯か。ジョブ専用装備にはステータスブーストがついてるもんな」  
つまりリキオーのHPが高くなっていたのは、彼のジョブである侍専用の装備をしていたためだったのである。

ちなみに、袖とはリキオーの両肩に装着されている小さな盾が組まれたようなパーツで、籠手は腕を覆う筒状の手甲である。佩楯とは太もも部分を覆う袖と似た形状のパーツだ。

防御面でいえば、胸の部分が空きなのが不安要素ではあるが、体を横にして袖を向け、敵に対して見える面積を極力狭くすれば、それだけで体のほとんどは隠れてしまうのでよしとしよう。

これらの防具と正宗は、高難度のクエストで手に入れることができる侍専用装備品で、本来レベル1で装備できるものではない。そもそも『アルゲートオンライン』では、装備に対してレベルが足りない場合は、重さに耐え切れず動けなくなるなどのペナルティがある。

しかし、リキオーのステータス上では、ペナルティどころか本来の性能を発揮している。正宗と同様にかなりチートとっていいかもしれない。

ステータス画面をスクロールして下に進めると、スキルが表示されるようだ。  
すでに獲得しているスキルは、侍の固有スキルである【両手刀 (b)】、鑑定能力だと思われる【鑑定 (c)】、そして何に使うのかわからない【翻訳 (c)】。ちなみに、スキル名の下のアルファベットは、熟練度を示している。

獲得可能なスキルは現時点では何もないようだ。そもそも割り振れるスキルポイントがないため

弄り<sup>いじ</sup>ようがない。画面を戻して、ステータスのボーナスポイントを割り振ることにする。ボーナスポイントをすべて振り分けると、次のようにステータスが変った。

名前 : リキオー (17)  
クラス : 自由人  
ジョブ : 侍  
レベル : 1

LP 12 HP 56 MP 13

力 : 26      耐久 : 13  
器用 : 13    敏捷 : 10  
知力 : 4      精神 : 4  
運 : 6

とりあえず、攻撃力の基礎値である「力」と防御力の基礎値である「耐久」に加算し、回避力に

関係する「敏捷」を底上げした。

ステータスの確認は以上だ。

立ち上がって正宗を握り、刀身を引きだして素振りをする、ビュッビュッと風切音がした。そうして、体に馴染ませるのを第一に考えて動いてみる。

「しかし、最初から正宗っていいのかな……。俺は嬉しいけど」

『アルゲートオンライン』において、侍のジョブが最初に扱える両手刀は無銘<sup>むめい</sup>刀<sup>とう</sup>だ。正宗は、レベル40以上で受けられるクエストで手に入る侍専用武器の両手刀で、反<sup>そ</sup>りが入った長刀である。

レベルが上がると、もっと攻撃力のある刀に装備を替えてしまうのが一般的だが、高志は本気武器以外のオシヤレ装備として、この正宗を愛用していた。というのも、本気武器のほうは、反りが入っておらずイマイチ格好よくなかったのだ。

正宗を振っていると、ステータスに表れない身体強化の効果がかかっているような気がした。体はずいぶん軽い。正宗に限らず、両手刀は結構重量がある大振りな武器である。しかし、今手にしている正宗は竹刀<sup>しな</sup>よりは重い程度の感触でしかない。

リキオーは正宗を鞘に納めて、その場でびよんびよんと飛び跳ねてみた。

「うん、やはりな。身体強化がかかっている」

いつもより機敏な動きができる。少し跳ねるだけで彼の前に立つ木々の梢<sup>しずえ</sup>に手が届き、さらに落下して着地するときも筋肉の動きが滑らかだ。



そういえば、ゲームにありがちな見えないカバンみたいなものはあるのだろうか。試しに、「アイテム」とか「装備」とか、関連すると思われる単語を呟いてみた。

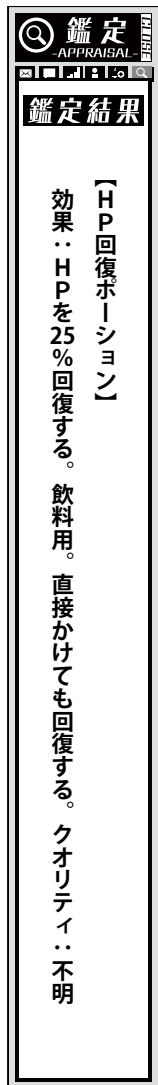
すると、ステータス画面の横からスライドするように、インベントリ画面と、装備画面が表示された。装備画面のアドバイザー表示には、リキオーの着ている服と正宗が映っている。

どうやって取りだしたり収納したりするのだろうかと考えていたところ、インベントリに赤いポーションらしきものを発見したのでタッチしてみる。

目の前に、試験管によく似た、赤い液体が詰められた細い透明な小瓶が、ぼろっと落ちてきた。高志は、それを手でキャッチしてしげしげと眺める。

「これがポーション？ HP回復なのかな」

じつと見ていたら【鑑定】スキルが働き、アイテムの名称が表示された。



「おお、便利だ」

試験管の上部、口の部分には金属製の安全弁が見える。中に充填じゅうてんされている赤い液体は目にかざすと不思議な輝きを放った。

【鑑定】スキルで見たアイテムの解説文にあるように、本来は飲用だが魔法により半物質化しているため頭からかけても回復する。

ポーションの味は柑橘系。ただし薬臭く美味しくはない。別にあるMP回復用は葡萄ぶどうのような味らしい。使用回数が決められており、それを超えると効果が急激に落ちるなど、中毒症状が出る。

解説文のクオリティ欄を表示させるには、上位の【鑑定】のスキルが必要なのだろう。ところで、取りだした方がいいが、逆に収納するのはどうしたらいいのか。

(ポーションの小瓶を収納！)

そう念じながら小瓶を握ったまま腕ごと左右に振ってみると、リキオーの右の脇腹あたりの空間を通った瞬間、小瓶が手から消えた。

「おおー」

インベントリを表示したところ、収納したポーションが、元々表示されていたポーションのまじりの隣にある。

スタックはできるのだろうか。スタックというのはまとめるということだ。

そこで、入れた小瓶をタップして元の位置に移動させてみたら、ポーションの表示の右下にあったスタック個数の表示が98から99に変わった。

表示されている半透明のディスプレイはさつと手を振ると消える。

また、声に出さなくても意識して「ステータス」と念じれば表示された。閉じるときはやはり「クローズ」と念じるだけで大丈夫だ。

インベントリの操作も何となくわかった。

例えば「ポーション」と念じながら、脇腹あたりの空間から引つ張り出す動作をすれば掴み出すことができるのだ。練習すると、懐からでも取り出すことができるようになった。収納も意識して動作すれば、どこからでも入ってくれた。ただしまとめのスタックは自動ではされないようだ。

改めてインベントリの中を確認する。そこには、金貨五百枚と、HPポーションが99個、MPポーションが45個スタックされていた。

さらに、沈黙薬と毒消しが50個ずつ、体調不良を防止するための丸薬や、予備の服装備とキャンプセットに、メモ帳の類と筆記用具。

そのほかには、魚釣り用の釣り竿セット、モンスター釣り用に弓と矢などが入っていた。

弓なのは釣りとはいかに如何に、と思うところだが、これには理由がある。

レベル上げパーティでは、侍などのアタッカー役が経験値に見合う敵を見つけ、キャンプにまで牽引する。これを指してゲーム内用語で「釣る」と表現するからだ。

それにしても、金貨五百枚、MPポーションが45個とは、半端な数だなと疑問に感じていると、そこではたと思いだした。

「金貨五百枚って、これ前のクエストで出たレア装備売って山分けした報酬そのまんまじゃん。MPポーションが45個なのは、そのクエストのときに猫魔<sup>ねこま</sup>にあげたからだし！」

高志は昨日、『アルゲートオンライン』の世界にダイブし、友人の猫型獣人の魔法使い、猫魔に誘われて、ダンジョンの中に迷い込んだ家出娘の捜索をするというクエストにつき合った。そこで一緒に行った軽薄な聖騎士がやたらめったらダメージを食いまくって往生したのである。

聖騎士は盾役の基本のようなジョブで、守りは堅いのだが、敵が強すぎるのか彼の装備ではダメージを吸収できず、猫魔が本来の仕事が減らして、彼の回復に徹することになった。猫魔が回復にMPを使いまくったので、彼女のMP回復分のポーションを高志が負担したのだ。

一通りアイテムの確認が済むと、急に今晚の寝床<sup>ねど</sup>が心配になってくる。

「さて、あとは街かな。野宿は避けたいよなあ……」

そう呟きながら、高志は自分がこれまでとは異なる世界にいることに思いを馳せた。とはいえ、この異世界に放り込まれたことに、特に不満もなければ帰りたいとも思わない。

むしろワクワクしている。どちらかと言えば現代日本社会に飽きていたほうだったからだ。

高志の両親は共働きのサラリーマンで、妹もいたが没交渉で仲が良いとはいえなかった。それでも家族としての絆<sup>きずな</sup>が薄いというわけでもなく、両親や家庭に不満もないが、未練もまたない。

事件もなく平坦に続く日常。ルールを引いたように何となく未来に見当がついてしまう。そんな毎日に比べたらこの世界に期待するもののほうが遥かに大きかった。

高志はここで改めて、新たに「リキオー」として生きていくことを決意するのであった。

まずは街へ向かうため立ち上がってはみたものの、全く方向がわからない。今歩いている場所に何となく勾配があるように感じられたので、それを下る方向に進んでみることにした。

歩くうち、先方の茂みからガサガサと音が聞こえる。

そして、そこから「ウウー」と唸り声を上げ、野犬のような四つ足の獣が急に飛びだしてきた。

「おっ、モンスターか！」

目を凝らしたら「ワードッグ」と表示され、名前の下にはHPを表すバー。目つきが卑しく、犬というよりハイエナのような見かけで、あまり愛でたくなる獣ではない。

もし、ゲームのときと強さが同じなら、ワードッグはレベル10相当のモンスターだ。戦闘において安全な彼<sup>ひが</sup>のレベル差は1から3ぐらいが妥当であるとされていたので、レベル1のリキオーではかなり危険な相手といえる。

しかし、そんな敵を前にしても不思議と怖くない。むしろ格下にさえ感じる。リキオーは鞆に正宗を納めたまま、モンスターを迎え撃つことにした。

ワードッグがタタツと駆け寄り、リキオーに向かって飛びかかってくる。

彼は冷静にモンスターを見据えて、体勢を少しずらしただけで避けた。

そして正宗の鞆でモンスターの首を横から殴りつけた。

「ギャウッン！」

ボキッと骨が折れたような音とともにワードッグが崩れ落ちる。

あつけない初戦だった。

刀を抜くまでもない。

倒れたワードッグに近づいてたしかめると、死後痙攣<sup>けいれん</sup>を起こしている。

その様子を眺めながら、リキオーは困ってしまった。

ゲームの中なら、倒したモンスターは光の粒となって消滅し、すぐドロップアイテムとなるが、この世界ではそんなことはなさそうだ。

もしかしたら収納すればアイテムとしてインベントリに入るのかもしれない。そう思い試してみることにする。手をかざして「収納」と念じると、ワードッグの死体は吸い込まれるようにパッと姿が消えた。

ステータス画面をたしかめてみれば、インベントリには素材として皮、牙、肉などが入っている。「助かった。血抜きとか肉を捌<sup>はく</sup>くのとかが勘弁して欲しいからな。それにしても命を奪うのに躊躇<sup>ためら</sup>いは感じなかったなあ。人型モンスターならどうなのかね」

そう呟き、リキオーはウィンドウを閉じた。

現代日本にいた頃は、彼は調理をしたことがなかった。せいぜい具材に包丁で簡単な切れ目を入

れたり、ぶつ切りにした野菜を鍋に投入したりした程度だ。しかし、この世界では、インベントリに入れるだけで、素材や食料に加工することができる。

(これはちょっと、信頼できる相手の前以外では見せないほうが無難だな……)

高志はそう決意した。

さらに森の中を歩いていくと、次に出会ったのは灰色のモコモコしたウサギのような獣であった。その生き物はリキオーを見るなり素早く姿を消してしまった。

「獣、だよな……」

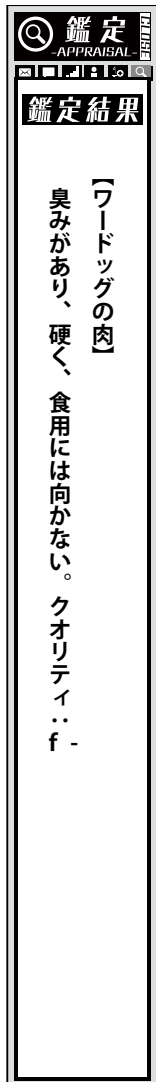
今度見かけたら相手に気づかれる前に投擲を試してみよう。そう考えて再び歩き出す。

侍は弓を使えるので【射撃】スキルも、拾った石や小刀などを使う【投擲】スキルも取得できる。遠距離からの攻撃は、相手に見つかっていない場合だと、不意打ちによるダメージボーナスがつく。歩きながら、ふとりキオーは思いついた。

ことによると、野宿の可能性も視野に入れておくべきかもしれない。となれば、野営して獲得したアイテムを加工して食料にする必要があるだろう。

(そういえばウッドッグを倒した時の肉って食べられるのか?)

インベントリから「ウッドッグの肉」と念じながら取りだしてみると、ムワツとイヤな臭いが漂った。思わず取りだした肉片を汚いものでも触るように、指先でつまむ。



「ゲツ、こりやダメだわ」

リキオーはウッドッグの肉を持っていても仕方がないと判断し、茂みの向こうに放り投げた。

「やっぱり、見た目がダメなら食用には向いてないのかねえ」

やれやれと思いつながら歩きだすと、今度は小川を見つけた。サラサラと流れる水は透明で綺麗だが、飲料用に適するかどうかはわからない。

あたりを見回して警戒しつつ、小川の上下流に何か獲物はないかと探してみた。

すると、さっき逃げられたのと同じウサギのような生き物を発見。

目を凝らしてたしかめたところ「グラスラビット」と表示される。

グラスラビットはさっきの獣のウッドッグと違い、魔物であるらしい。

魔物の中でも最低レベルのレベル10相当だが、ウッドッグを格下と感じたように、グラスラビットを前にしても強さを感じない。

リキオーは手頃な石を河原から拾い上げ、水切りをする要領で放つ。

軽く投げたつもりだったのに自分でも思ってもいなかったほどのスピードが出て、グラスラビットの体を撥ね飛ばした。

悲鳴を上げる暇もなく倒れるグラスラビット。

グラスラビットの上に見えていたライフを表示するバーが一瞬、攻撃されたことを示す赤色に変化し、すぐにゼロになって消える。

「よしっ」

リキオーはグツと手を握りしめて、やったぜと心の中で呟く。

グラスラビットの死体に近づき、収納して、インベントリをたしかめた。

獲得したアイテムは、グラスラビットの毛皮と魔石。

ステータス画面を開くと、レベル3が上がっており、取得スキルの末尾に【投擲（c）】が追加されていた。レベル10モンスターを二体も倒し、さらに一方が魔物だったので、経験値を多くもらえたのだ。

レベルアップにより獲得したスキルポイントで、さっそく【見切り（c）】を獲得する。

これは、敵の動きや構えから、使ってくる技や出方などを判断し、紙一重で攻撃をかわすスキルである。

まだまだ疲れてもいないので、街を探すついでに少しレベルアップを目指そうと森の中を進む。すると、先ほどの小川を下って数キロ進んだあたりで、森の植生が明らかに変化した。

今までリキオーがジャンプすれば届く程度の低い木しかなかったのに、木々の間隔が広がり、大振りな木が増えたのだ。

そこには獣道と思われる小道が続いていた。

リキオーは、これ幸いとばかりにその道を辿って歩きはじめる。

しばらくすると、「キヤアッ」と明らかに女性と思しき悲鳴が響いてきた。

リキオーは、声のしたほうへ駆けだし、茂みを掻き分けていく。視界の先に、細い足首を押さえ蹲るセミロングの青い髪の少女が見えた。

そして、彼女を狙い、五匹のワードッグが少女の退路を断つように唸り声を上げている。

## 2 第一村人と遭遇

（おおっ、可愛い子ちゃんハッケーン！）

リキオーは脳天気に関を綻ばせながら、ワードッグ目がけて正宗を振りかぶる。

大振りな一刀目は、ワードッグが素早く動いたためにあっさりと避けられた。

その隙を狙って、二匹のワードッグが彼の元に殺到した瞬間、リキオーは再び刀を振り上げる。所謂、燕返しである。



ワードッグは衝撃で「ギャウン！」と甲高い音を上げて吹き飛んだ。

少女は突然現れたリキオーに驚いていたが、足首の怪我のため動けずにいる。

「大丈夫か？」

「あ……」

「すぐ片づけるから安心して」

驚きのあまり言葉が出ない少女に、リキオーはニカツときこちない微笑みに向け、残りのワードッグと少女の間に割り込んだ。

そしてその獣たちと対峙すると、抜いた刀をあえて鞘に戻す。

獣たちは涎を垂らしながら、隙だらけのリキオーに襲いかかった。

少女は、目の前の男がモンスターの餌食になるところを想像して思わず目を瞑る……。

しかし、彼女の想像に反してその耳に聞こえてきたのは、ワードッグたちの叫び声だった。

「ギャウツ！」

リキオーは重心を低く落とした状態から刀を抜き放つと、襲いかかってきたワードッグを一掃してしまったのだ。

振り抜かれた刀の軌道上では、モンスターたちがまるで空間に縫い止められたように、あるものは両断され、あるものは致命傷を負って鮮血を噴き上げていた。

少女は、目の前で起きたことに判断が追いつかず呆然としている。

宙を舞っていたワードッグたちは断末魔の叫びとともに、ドサツドサツと茂みの中に落ちていった。

リキオーは、刀を左右に振って血を落とすと、刀をクルツと回し鞘に納める。

そして、ボスと思われる大型の死体に近づき、それをインベントリに収納した。それから、未だに震えて動けずにいる少女に話しかける。

「大丈夫？」

「は、はい。……あ、あの、ありがとうございます」

「無事でよかったですよ。おっと、怪我してるのかな」

「ワードッグから逃げるときに挫くじいてしまっただけです。でも大丈夫ですよ」

足首を見つめられたのが恥ずかしいのか、少女はポウツと頬を赤らめた。あわてて立ち上がろうとするが、痛みが走うずってすぐ躓すまってしまう。

「無理しないで。あつ、そうだ」

そう言って、リキオーは懐からポーションを取り出した。少女の前で試験管の口を緩め、ポタポタと彼女の足に数滴垂らす。

少女は何をするんだろうと、されるがままにしている。

やがて垂らされた赤い液体がポワポワと不思議な輝き放ち、彼女の足から痛みが引いていった。

「えっ、あ、あの、それ……」

少女は初めて見る現象に驚愕きょうがくし、パクパクと口を開いて絶句している。

「気にしないで。たまたま持ってたから。もう痛みは引いたかな」

少女は立ち上がり、恐る恐る足を踏みしめる。そして足の状態が万全だとわかると、リキオーに笑いかけた。

「あ、あの私、イリヤです。危ないところを助けていただきありがとうございます」

「俺はリキオー。こっちこそ助かったよ。実は道に迷っちゃってさ。よかったら君の街まで連れてってくれないかな」

リキオーの唐突なお願いに、イリヤはクスツと小さな笑い声を立てる。

「ウフフ、変な人ですね。あんなに強いのに迷子さんなんですか。いいですよ。それぐらいお安い御用です。助けていただいたお礼もしたので、どうぞついて来てくださいね」

リキオーは誤魔化し笑いを浮かべて、イリヤと並んで歩きはじめた。

歩きながら、彼は隣のイリヤをチラチラと観察する。

イリヤは並より上の美少女だ。青い髪なんてまさにファンタジーだし、顔立ちは整っている。控えめな笑う方は人好きのする感じで魅力的だ。

着ているのは、白っぽい布で作られた貫頭衣かんどうい。腰のあたりを紐で縛っていて、健康的な太ももが付け根からスラリと伸びている。さつき足を挫うずくまくまして蹲すくまっていたときにチラツと見えた感じでは、下に穿はいているのはショートパンツみたいだった。



視線に気づいたイリヤが見返してきたので、あわててリキオーは視線を逸らした。

イリヤは思いついたようにリキオーに質問する。

「リキオーさんは剣士様ですよ。こちらにはどうやっていらっしゃったんですか」

答えずらいことを聞かれ、リキオーは戸惑う。

「あ、ああ、俺の国はジャポンっていつて東方にあるんだが、森の奥でモンスターに襲われて仲間と散り散りになってしまつて……。この辺のことはわかんないし困つてたんだ」

なんて、テキトーなことをでつち上げてしまつた。

「まあ、それはお困りですね。今夜は私の家でお過ごしください」

「えっ、いいの？ 知らない男なんて泊めちゃつて困らない？」

「ウフフ、兄がいますから大丈夫ですよ」

イリヤは悪戯いたづらっぽい微笑みを浮かべた。

二人でしばらく歩いていくと、森が切れて開けた場所に入った。

丸太で組んだ門があり、そこを通ればイリヤの住む村のようだ。

門の前には門衛らしい男が立っていた。

「あ、マイヤーさん」

イリヤが声をかけると、マイヤーと呼ばれた男はいきなりリキオーをにらみつけ、腰に差した剣の柄に手をかけ警戒しはじめた。

「イリヤ、そいつは誰だ？」

さすがにこれだけの美少女だ、村のアイドルだったりするのかもしれない。そんなことをぼんやり考えていたら、イリヤが割つて入つた。

「この人は、森で私がワードッグに襲われていたところを助けてくれたんです」

「お？ そうなのか。見たところ剣士といった感じだな。イリヤの恩人はサテラ村の恩人だ。さ、入つてくれ」

マイヤーはそれまでの高圧的な態度から一変し、人懐っこそうな髭面ひげづらを綻ほころばせ、リキオーの肩を叩いて門の中へと誘いざなつた。

門をくぐり抜け村に入ると、イリヤは気取つたように、その場でクルツと回つてみせた。

「リキオーさん。サテラ村にようこそ。私と兄の家はこつちです」

リキオーはクスツと笑い、先を歩く彼女の後を追つて歩きはじめた。

通りにいた村人たちがイリヤに挨拶をし、彼女より小さな子供がリキオーを指さして笑い声を上げた。しかし嫌な感じはせず、村人たちの純朴さが窺うかがい知れた。

自分の家まで来ると、イリヤは玄関から入つていき中に向かつて声をかける。

「兄さん、ただいま。お客様がいるの」

中から出てきたのは、引き締まつた体つきをした若い男である。

「ん、イリヤ。そいつは誰だ」



でメモったリキオーだった。

「おう、それだ。売れるから取つといたほうがいいぜ」

いいことを聞いたと思ったところで、ふと彼らの生活が気になったので聞いてみる。

「ところで、ツールさんたちは何で生計を立ててるんですか？」

「タメ口でいいぜ。俺は木こりだな。イリヤは畑もやっているんだが、このあたりの森は回復薬の材料になる薬草が取れるんで、そこそこの収入になるんだよ。今までは出てモワービットぐらいで、ワードッグなんて見なかったんで安心していったんだがな」

それを聞いてリキオーは提案する。

「それなら俺がイリヤの護衛をしようか？ タダ飯食らいで居候してちゃ申し訳ないし」

「ワハハ、気にすんな。だが、暇なら時々護衛してくれ。いつも森に行くわけじゃないしな」

ツールは気前よく笑い、イリヤも微笑んでいた。

それから三人で食事を取り、それを終えたとリキオーは寝室として空き部屋に通された。

それほど疲れたつもりもなかったが、思いの外、疲労が蓄積していたのだろう。硬いベッドに横になり、ぼんやりと天井を眺めるうち、いつの間にか寝入っていた。

\*\*\*

「うーん」

パツチリと目を開いて起き上がると、自分が一瞬、どこにいるのかわからなくなった。

しかしすぐに昨日、イリヤを助けて彼女の家に泊めてもらったことを思い出した。

「ここどこ？ ……ああ、そうか。イリヤの家か。さて、どうしたものかね」

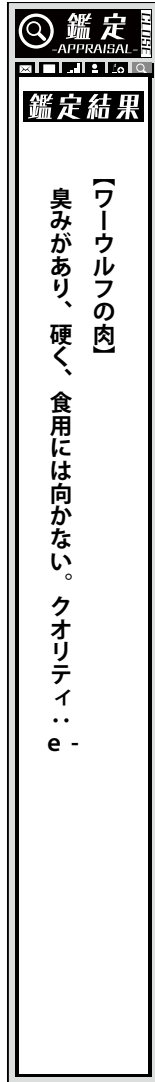
リキオーはとりあえず、ステータス画面を表示させてみた。



(おつ、レベルが一気に2も上がってる。最初なんてLPが12だったのになあ)  
 しかし、よくよく考えるとワードッグなんて雑魚モンスターで2もレベルアップするのはおかしい。

インベントリで鹵獲品を確認してみたところその謎はすぐに解けた。

ワードッグの肉の中にワーウルフの肉が交じっていたのだ。夢中になっていてわからなかったが、ワーウルフも倒していたらしい。ワーウルフはワードッグの上位体モンスターだ。群れで行動し、鋭い牙は新人プレイヤーには脅威の対象となっている。



(やつぱりこれも食用ではないのか。ワー系は諦めたほうがいいのかな。それとも犬とか狼だからなのか……うーむ)

考え込むリキオー。

とりあえずワーウルフの肉も廃棄することにした。

ステータス画面に映るインベントリの画面をいろいろと触っている内に発見したのだが、画面の下にあるゴミ箱にアイテムを移動するとアイテムは廃棄され、謎空間へと消えていく。

(さて、レベルアップで手に入れたスキルポイントはどう振ろうかな)

昨日の昼間、出会う人に対して、それとなくステータスサーチをかけてみたことを思い出す。

『アルゲートオンライン』ではパーティを組むのいくつかの方法がある。  
目の前にいる相手に直接交渉して組むのもありだし、同じ地域にいる不特定の人間をサーチして探し、ゲームシステムに用意された遠距離チャットで話しかけて誘うという方法もある。  
サーチの条件はいろいろと変更することができる。レベルであったり、装備品であったり、性別であったり。

この世界では、チャットはできないがサーチだけはできるようになっているらしい。これは、作日いろいろといじってみて確認済みだ。

村の入り口の門で会った門衛のマイヤーのステータスはこんな感じだった。

ステータス -STATUS-

名前 : マイヤー (22)  
クラス : 門衛  
レベル : 5

LP 31 MP 2

力 : 27	耐久 : 26
器用 : 12	敏捷 : 9
知力 : 12	精神 : 13
運 : 14	

(斧を背負っていた気がするんだが、クラスは門衛なのか。NPCによくいる職業じゃないか。レベル1でポイント振る前の俺よりはライフポイントが高いけど、うーむ、それはプレイヤーとNPCの差なのか)

というのが、そのときのリキオーの感想だった。

門番という無骨なクラスで、魔法とは縁がなさそうなのに、MPが2もあるというのは、この世界の住人がおしなべて魔力を持っているということだろう。

マイヤーのステータス画面を思いだしてみたものの、あまり参考にならなかったのも、自分のステータス画面を見ながら考えることにした。

「何か取れるスキルはあるかな、と」

ジョブ専用スキルはレベルが上がるたびに、獲得できるものが増えるようになっていく。対して、ジョブ共通の基本スキルは最初からすべて取得可能だ。どちらも取得にはスキルポイントが必要になる。

今リキオーのスキルは【鑑定(c)】【翻訳(c)】、そして最初の日に取った【見切り(c)】がある。すでに持っているこれらのレベルを上昇させることもできるが、それをするには新規のスキル獲得の倍のポイントが必要なため今は無理だ。

ジョブ共通の基本スキルの場合は、取得するのに消費1ポイントで済む。

それに対して上位スキルである【自動MP回復】などの獲得ポイントは3で、スキルレベルの上昇に必要なポイントはそれ以降6、12、24、48、96となっている。

結局、リキオーはスキルポイントを消費して【鷹の目】と【警戒】をとった。

【鷹の目】は、目標物に目を凝らすと視界の一部分だけにズームがかかり、詳細な情報を得ることができる。偵察任務には持ってこいである。

【警戒】は目に見える、見えないにかかわらず、危険が迫ると音叉を鳴らすような効果音で知らせてくれる大変有用なスキルだ。

スキルの取得を終え、武器や装備を操作するためのウィンドウを触っていると、イリヤが顔を覗かせた。

「あ、リキオーさん、おはようございます。早起きなんですね。兄なんて私が起こすまで寝ているんですよ。ご飯できてますからどうぞ」

「イリヤ、おはよう。すぐ行くよ」

クスクスと笑う美少女の微笑みにドキドキしながら、ウィンドウを閉じて部屋を後にした。

ステータスウィンドウを他人に見えないように不可視モードにしたままでよかった、とリキオーは思った。見つかったら、何を言われるかわからない。

部屋を出て昨日と同じ席に着くと、木の椀と皿に盛りつけられた簡単な料理が出される。パンと山芋に似た植物で、味はともかく腹が膨れるのでリキオーも満足だ。元々、舌がお子様仕様で味音痴気味なので、極端にグロイ物以外は何でもオツケーだが。

「今日はどうするんですか？」

出されたものをパクパクと平らげるリキオーに、イリヤはニッコリと嬉しそうに微笑みながら尋ねる。そんな様子をツールは挙動不審な眼差しで見つめている。

イリヤの問いかけに、リキオーは、実際どうしたもんかと首を捻った。

正直この家は、イリヤやトールの気持ちのいい性格のお陰で居心地がいい。しかし、それに頼って長居するのも腰が引ける。冒険者ギルドか何かでクエストを消化して食っていくのが一番簡単なのだが、こんな辺境の村にあるだろうか。

そう考えてリキオーは尋ねてみた。

「この村に冒険者ギルドはあるのかな」

「ギルドはもっと大きい村に行かないとないぜ」

トールが楽しそうに目を輝かせながら答える。リキオーの食べっぷりが嬉しく、ついつい笑顔になっってしまうようだ。

「兄さん、隊商のエイドラさんが来るのってそろそろよね。リキオーさんを紹介して連れて行ってもらうのはどうかしら」

「ああ、それはいいかもな。ウッドッグを軽くあしらえる程度の腕があれば、護衛にはもってこいだ」

隊商とは地方の村々を巡回する商人だ。聞けば、イリヤの葉草採取もその隊商のエイドラという商人との取引で、貴重な現金収入になっているらしい。

「そろそろ来る頃合いだし、こんな小さな村ですから来たらすぐにわかりますよ」

「そうか。それじゃ、それまでブラブラさせてもらうよ。何か頼みたいことがあるれば何でも言ってくれ」

リキオーはイリヤたちにニッコリと頷いてみせた。

朝食を終えると、トールは斧を担いで製材所に出掛け、イリヤも村の奥にある畑へと向かってしまった。

残されたリキオーはすることもないので、文字通りブラブラと村の中を歩きまわった。

小さい村であるため、村人たちは家にカギをかけてないし、窓にもガラスなんて入っていない。

あるのは木戸ぐらいだ。

虫はいるのだろうかと思っただが、この世界にはそもそも虫がいないことがわかった。

ファンタジー万歳である。それだけでリキオーはこの世界が一気に好きになった。ゴキブリに辟易としていた彼にとっては天国そのものだ。

虫がいない代わりに、植物の力はかなり強いらしい。

昨夜、イリヤとトールの家でトイレを借りたところ、驚いたことに臭いが全くしなかった。そのことを尋ねると、「森人様のお陰よ」と返され、全く理解不能だった。どうやら植物に関係するらしいのだが、このあたりはそのうち調べたほうがいいのかもわからない。

やることもないので、とりあえずレベル上げをすることにした。門衛のマイヤーに声をかけて、森に分け入ると、そこでウッドッグを中心に狩りを行った。

ウッドッグは、現在のリキオーとレベル差があるので、倒せば取得経験値にボーナスがつく。リキオーは、初心者レベルなのに装備品は高レベル者と同じものをつけている。それらを使いこなしているため、ウッドッグ相手にもかなり楽だ。



初心に戻って刀の振り方を思いだすように居合の型、抜刀術の基本に沿って正宗を振りながら、魔物を倒していく。思いの外体に馴染んでいたのか、過去に使った技をなぞるように体が動いてくれた。

しばらくワードッグを倒していたが、少々物足りなくなってきたのでワーウルフにも手を出してみた。

それでも全く問題がなく、全て一刀のもとに斬り伏せていく。

そうしている内に経験値は蓄積されていき、リキオーはほとんど疲労を感じることもなくレベル上げを終えた。

『アルゲートオンライン』では、レベル20でそのジョブの成熟期に入り、レベル30になると完成と言われている。成長期であるレベル20までは、次のレベルまでの必要経験値の増加は1レベル毎に200程度と低いため、レベルが上がりやすい。

今回の狩りでレベル10まで簡単に上げることができた。

ステータスを確認すると、スキルポイントと、レベル10ごとに自動取得する侍専用のウエポンスキル【刀技必殺之巻・疾風（C）】を獲得していた。

さっそくスキルポイントを消費して【明鏡止水（C）】を手に入れる。

【明鏡止水】は精神が研ぎ澄まされる効果と、混乱無効の追加効果がある。戦闘時にあつて余裕がないときでも積極的に使うべき、侍の基本スキルだ。

『アルゲートオンライン』をプレイしていたときも、鳥型のモンスターの一部や虎型のモンスターには、混乱のスキル持ちがいたから、このスキルに何度となく助けられた。混乱状態に陥ると武器が使えないばかりか、パーティにおいては味方を攻撃しはじめたりと、非常に危険なのである。

刀技は、侍のジョブ固有のウエポンスキル、いわゆる必殺技だ。必殺と言っても大きなダメージが出るだけで、一撃で相手を倒せはしない。

MPを消費して発動し、大技であるため必然的に隙ができる。そのため、もう少しレベルが上がってから入手するスキルである、分身を作り攻撃を回避する【心眼】を覚えてからでないと実用的ではない。

【刀技必殺之巻・疾風】は、侍が初めて覚える刀技である。基本、対空攻撃だが対地でも使える。

鞘走りから、刀を振り抜く。これがこの技の発動時の基本の形となり、左腰から発し、右上方へと刀を振り上げ、衝撃波を飛ばすのだ。

属性は風でMP消費も小さい。リーチもあるため、大技のあとの硬直時間を考慮しても、使う機会が多い。ただ、侍の全ての刀技は抜刀術のため一度鞘に納める必要がある。抜身のまま武器を発動できないのは侍だけだ。

ちなみに侍の刀技は全て二段構えとなる。まず刀によって直接ダメージを与え、ついで特殊効果で追加ダメージを与える。しかも刀技には全て、敵の防御力を落とす効果がある。

リキオーはレベル上げの成果に満足すると、村に戻った。

村は三十世帯程度で、村人の全員が顔見知りである。家は村長の家が少し大きい程度で他は同じくらい、木こりたちが通う製材所が一番大きな建物だ。

そんな辺境の村に娯楽なんてあるわけがない。それでも、村の子供たちはみな笑顔で楽しそうに走り回っていた。村の南側には周りを塀で囲われた畑が広がっている。リキオーがそこを通りがかると、彼に気づいたイリヤが手を振ってくれた。リキオーはそれに手を振り返して、いつのまにか彼の後をついて来る子供たちに苦笑しながら歩いていった。

「リキオーさん、子供たちに人気ですな」

夕食時に、イリヤにそんなふうにかかわれた。

パンと芋類の相変わらず質素な食事だが、イリヤのように可愛い女の子が作っているというだけで美味しく感じる。

「ああ、俺が珍しいんだろ。村に遊ぶところなんてないしな」

「リキオーさんの住んでいたところ……ジャボンでしたっけ？そこはどんなところなんですか？」

イリヤに尋ねられて、現代日本の故郷のことを思い出す。日本の薄汚れた空と、この世界の澄んだ青空では雲泥の差がある。

「島国でさ、周りが海に囲われた小さい国さ」

イリヤは見たことのない国の話に、目をキラキラと輝かせて聞き入っていた。リキオーがやや卑

屈気味に言った語感には気づかずに。

イリヤが問いかける。

「ウミ？ウミってなんですか」

「海はでっかい水たまりかなあ。それで塩水なんだよ」

二人の会話にツールが夕食を口にしながら口を挟む。

「へえ、美人は多いか？」

イリヤがツールを怖い目でにらんだが、気にせずリキオーは答えた。

「どうか。寒いところには多いみたいだぞ。俺の国は季節がいろいろあるんだ。春は花が綺麗だし、夏は暑いが美味しいものも多いし、秋は木の葉が赤く色づいたり、冬は雪が降ったりするんだ」  
「雪！雪って冷たいんですよね。神域の奥にある山のでっぺんにはあるって、神父様が仰っていましたよ」

楽しそうに大きな声を上げるイリヤ。

きつと、狭い村だけに広い世界や他の世界のことを聞かされるとワクワクしてしまうのだろう。

リキオーも美少女が楽しそうに微笑んでいるだけで楽しくなってくる。

「楽しそうなんですね。いつか行ってみたいです」

「ああ、もし行くことがあったら俺が案内してやるよ」

「きつとですよ」

立ち読みサンプル  
はここまで

まあ、そんなことがあるとは思えないが——。リキオーはそう思い苦笑しながらも、会話を楽しんでた。

翌日、イリヤの作ってくれた朝食を平らげて、リキオーが部屋でぼんやりしていると、通りから賑やかな声が聞こえてきた。

外へ出てみたら、ちょうど畑から戻ってきたイリヤと出会う。

「あ、リキオーさん、隊商が来たみたいですよ。私も集めていた薬草を持っていきますから、一緒に行きましょう」

現金化するために薬草を持っていくらしいイリヤと一緒に、村の広場に向かった。

そこには、三台の馬車が並んで停まっていた。大きな荷台には、細々としたものが載った上からネットがかけられ、荷台の真ん中では、護衛だろうか、背中に長剣を背負った若い男が寝転がっている。

先頭の馬車に目をやると、人集りがあつた。

人集りの中心には腰をかがめた好々爺こうこうやといった感じの身なりのよい老人がいて、村長と話していた。その老人にイリヤが話しかける。

「エイドラさん、こちらはリキオーさんです。とても強い剣士様です。よかつたら一緒に連れてってもらえませんか」

イリヤの顔を認めたエイドラは、孫を見るような微笑みを浮かべた。

「おお、イリヤか。剣士とな、ほほ、たしかに強そうな面構えをしているの」

エイドラが、リキオーの顔をジロジロと見つめる。

「ええ、森でワードッグに襲われた私を一瞬で助けてくれたんですよ」

「ほう。それは素晴らしいの」

好々爺と思われた老人の細い目が一瞬見開かれた。

そして、リキオーを見据え、ウンウンと頷く。

「いいじやる。見ての通りウチは三両の隊商だ。先頭はウチの使い手が乗ってるから、真ん中の馬車を頼むぞ」

「わかりました。リキオーです。よろしくお願いします」

臨時の契約の代わりに、隊商のリーダーを務めるこの老人と握手する。

老齢にもかかわらず現役を張っているからだろうか。握る手が痛いぐらい力強い。

「リキオーさん、よかつたですね」

「ありがとうイリヤ。君のお陰でいろいろ助かったよ」

イリヤはパアッと笑顔になって我がことのように喜んでいる。

リキオーは照れ笑いを浮かべて、イリヤとの別れを惜しんだ。

「近くに来たらまたウチに寄ってくださいね。いつでも歓迎しますから」